

特別会員寄稿

歌舞伎への招待

共立女子大学名誉教授 近藤 瑞男



歌舞伎は江戸時代の芸能ですから、言葉も現代とは異なりますし、生活背景も違って、テレビを見るようなわけにはいきません。それに第一、料金が

高い。でも先にお話ししておけば、通の通う三階席は四千円くらいで、人間国宝がナマ出演する舞台を半日楽しめますし、劇場内はちょっとしたワンダー・ランドですから、お釣りがくるくらいではないでしょうか。

もともと歌舞伎は、高級で解りにくいものではありません。歌舞伎が出雲のお国という女性の始めた踊りであったことはよく知られていますが、その踊りの伴奏は当時の流行歌で、「恋しい男が朝、帰ってしまって寂しくてたまらない」とか、「一人で寝る夜はつらい」といった、男と女の仲をうたったものでした。しかも今の盆踊りのように、振りと歌詞とが別々の、今の日本舞踊とは全く違う踊りやすいものでした。お国がデビューしたのも十二・三歳の頃だったようです。こうした少女の始めた踊りが、何回かの幕府の禁止によって、少年の踊りから、男性の演じる芸能へと成長していったのです。庶民の中に広まった歌と踊りが、歌舞伎の原点なのです。

女形という、歌舞伎の独特な表現も、こうした歴史の中で生まれたものでした。女性の歌舞伎が、一方では身体を売るような一面を持っていたため、幕府は禁止してしまいます。またそれに代わって人気を得た少年の歌舞伎も同じ理由で禁止されますが、やがて前髪を剃った青年ならばということで許可を受け、芝居も加えて演じられるようになりました。男性が女性を演じる女形は、こうして誕生したのです。

しかも女形は、女性が演じるよりはるかに激しい思いを、舞台上で表すことができるのです。有名な「伽羅先代萩」のヒロイン政岡は、我が子が目の前で悪人に殺される場に遭遇します。悪人の前では悲しみをこらえています。人々が去った後、我が子を抱

きしめ、身もだえして泣き崩れます。日常の生活の中ではありえない悲劇ですが、こうした悲しみは、女性が演じるより女形が演じた方がはるかに激しく表わされるのです。しかもその動きは、あたかも舞踊のように美しい。皆さんにも、坂東玉三郎の演じるこの悲しみの姿を見て頂きたいものです。

あるいは「勧進帳」の、弁慶と関守り富樫の男らしさ。安宅の関で、下人になっている義経が富樫に呼び止められた時、弁慶は主君義経を下人として打ちすえます。それを見た富樫は、下人が義経であると気づきながら、弁慶の苦衷を察し、関を通してやるのです。

歌舞伎には、市川團十郎というスーパー・スターがいて、代々「荒事」という演技を創りだし、演じて来ました。「歌舞伎十八番」は、團十郎の得意狂言を十八集めたものです。歌舞伎のシンボルとしてよく使用される「隈取り」は、團十郎が創作した化粧法ですが、自分の家の芸を「歌舞伎十八番」と言うてはばからないところに、團十郎の凄さがあるのです。女形だけではなく、立役（男性役）も、大いに魅力的だと言ってよいでしょう。

そして歌舞伎のもう一つの魅力が、客席を貫く花道の存在でしょう。世界でも類のない舞台機構。登場人物の華やかな登場、悲しみに満ちた退場に、これ程効果的なものはありません。歌舞伎十八番「暫」の、花道の出の長台詞は、春の訪れをことほぐ、めでたさが込められています。また先にふれた「勧進帳」の弁慶の引っ込み。先に出発した義経を追いかけるのですが、「飛び六方」と呼ばれ、迫力ある動きを花道で見せます。そして「先代萩」の大悪人仁木弾正の引っ込みは、何と花道が雲の上を表し、弾正はふわふわと雲の上を歩くように、花道を入るのです。また「妹背山婦女庭訓」では、上手、下手の二本の花道が使用され、それが吉野川の両岸を表すのですから、びっくりさせられます。

皆さんも、是非、歌舞伎の世界へお出かけください。決して古臭く、退屈なものではないのだと気づかれることでしょう。